



# ジェントルハート通信

## No.64

### 2020年春号

発行：NPO法人ジェントルハートプロジェクト 発行日：2020年4月5日

URL：<http://npo-ghp.or.jp> Tel. +Fax. : 045-845-3620(小森)

定価：100円(会員無料)



## 「歩と生きる」

理事 中谷加代子

山口県在住の中谷です。現在私は、高校や中学校などで子どもたちに向けてお話をしています。娘を事件で亡くした母親である私が、どうして子どもたちに語りかけているのか、実は自分でも不思議な気持ちになることがあります。

高専に通っていた娘は、5年生の夏休み、自分の学校の研究室で同じクラスの少年によって殺害されました。娘の歩(あゆみ)は当時20歳、加害者の少年は19歳でした。少年はその後、山中で自殺したため、彼からは言い訳さえ聞けませんでした。

事件後は、悶々と過ごしていました。新聞を広げ、ぼんやりと眺めるだけの時間をどれくらい過ごしたのでしょうか。職場には復帰したものの、大して戦力になっていなかったように思います。心の中には整理しきれないものがそのままになっていて、その荷物は重くなるばかり。

事件から5年を経て退職を決断しました。

退職を機に、被害者支援センターの支援員養成講座を受講し、支援のお手伝いや啓発用のティッシュ配りなどをするようになりました。

支援センターには、学校や矯正施設から被害当事者の体験談が求められることがあります。

元々人前で話をするのは苦手で、仕事をしていた頃も人前が出る機会は極力避けてきた私でしたし、事件の話をする事への抵抗や自分の心境がどこまで伝えられるのか不安もありました。それでも、こんな私でも何か役に立つことがあればと、講演を引き受けてみることにしました。

突然起きた事件を受け止めることは難しかったこと、大勢の方に支えられて生きてきたこと、そして、結局は自殺してしまった加害者ですが、その彼にして欲しかったこと。率直にお話ししました。

流れのままに引き受けた講演でしたが、何度か回を重ねるごとに、「彼がこんな話を聞いてくれたら、事件は起きていなかったかもしれない」と思うようになりました。また、聞いてくれている子どもたちには、「事件や事故の加害者にも被害者にもならないで欲しい。幸せをいっぱい感じて生きて欲しい」と思うようになりました。

お話の最後に、皆さんは「そこに居るだけで価値がある」と。「生まれてきてくれてありがとう」「生きて、そこに居てくれて本当にありがとう」と生命への

感謝を込めて伝えています。家族間でもなかなか言いにくい言葉ですが、初対面の私の言葉を子どもたちは十分に受け止めてくれていると感じています。

その感性の豊かさに触れ、私自身もお話しして良かったと自己肯定感をもつことができるのです。

後日、子どもたちが感想文を送ってくれます。「初めて生きることを実感することができた」「今を大切に生きたい」「私の本当の幸せは生きていること」「親や友人に感謝したい」(高知県 高校生)、「生きていて良かった」「生きるということは未来を信じ続けること」(熊本県 中学生)などと嬉しい思いを寄せてくれます。

お話をすることが辛いときもありますが、子どもたちが「いのち」のことや「生きる」ということを考えるきっかけになるのなら、もうしばらくは頑張れるかなと思っています。

学校での命の授業は、私が子どもの頃には無かったように記憶していますが、子どもの心が成長する過程でとても大切な時間だと感じています。子どもたちには、是非いろんな人のいろんな話を聞いて、いろんな人生があることを知って欲しいと思います。

事件の話は、大人にとってもテレビの中のことであり、子どもたちには馴染みのない話でしょう。でも私が、いじめ問題を引き合いに「いじめは心や身体への暴力であり、最後にはその人の生きる力を奪ってしまう。殺人といじめはそんなに遠い言葉ではないのかもしれない」と投げかけると、子どもの中には、殺人もいじめも同じ命の問題だと捉えて、自分の生活に投影して考えてくれる子もいるようです。

殺人は、殺意がなければ事件は起きなかったはず。いじめもまた、加害行為をしないですめば、いじめは止められるはず。殺人もいじめも加害者側の心の問題ではないのでしょうか。その問題に対して、私にできることがあるのならやっておきたいと思いません。

娘を事件で亡くした母親である私が、どうして子どもたちに語りかけているのか、答えの見えない道を手探りで進んでいるのかもしれない。模索はもうしばらく続きそうですが、でもきっと、私のとなりには歩がいて、応援してくれていると思うのです。

## 「講演回数がもうすぐ1500回」

理事 小森美登里

新型コロナウイルス感染症発生をきっかけに全国の学校で一斉休校が実施されています。これにより、春に企画されていた私の講演の多くがキャンセルになっており、また、規模の大きな教員研修も予定されておりましたので大変残念です。

その様な状況ではありますが、4月には私の講演回数が法人立ち上げから1,500回になります。

改めてこの講演回数を見て思うのは、当然ではありますが個人では到底この問題解決には力が及ばないという事です。

子どもたちの人数は減り、多くの学校が統合や閉校へという流れがあるにもかかわらず、文部科学省の発表によりますと、いじめの認知件数や不登校の件数は激増しており、毎年子どもは自殺し続けているのです。厚生労働省の2019年度自殺発表によりますと、未成年の自殺原因のトップは学校問題であり、十代の自殺は三年連続で増え続けています。

いじめの認知件数はいじめの定義が変化することにより変動しますので実態とは乖離している可能性があります。不登校の人数というのは子どもたちの苦しい現状をかなり近い数字で表しているのではないのでしょうか。

厚生労働省の発表にある「十代の自殺の増加とその原因」のトップが学校問題である事と、文部科学省の発表にある「いじめ不登校の激増」は、学校内にその原因があることを裏付けているかのようです。

私としては、子どもたちが講演をきっかけとして心や命について何かを感じてくれていることを望みますし、そのきっかけが予防につながった子どももいるかも知れません。先ほど申し上げましたように、やはり一つの法人の活動には限界を感じています。かといって、この問題改善への方策が何も無い訳ではありません。

その方策の一つとして重要なのが、教員へのいじめ対応の研修を充実させる事だと私は思っています。

現場では、初動のいじめ対応はどの様に行われているのでしょうか。

もしもマニュアルが存在するならば、それらは正しいものなのでしょうか。先輩からの教えは正しいのでしょうか。

子どもの声を聞きながら、一刻も早く現場の対応を検証するべきと考えます。

私なりに今すぐ出来ることをみつけ一日も早く実行しなければならぬと実感しています。

次の時代を創るのは今の子どもたちなのですから。

子どもの問題、子どもの心の問題は次の時代を創る上での礎となりますので、子どもの問題に第三者はいないと言えるのではないのでしょうか。

講演のキャンセルが続き時間が生まれた私は、以前から関心を寄せていた何本かの映画を見る事が出来ました。

その中の一本は堀潤監督の『わたしは分断を許さない』です。この映画から、全てが繋がっているという強いメッセージを感じました。

映画の内容を私から一言で伝える事は勿論出来ませんが、今起きている問題に人々が無関心となってしまうことへの脅威、そこから生まれる分断というものに関する問題提起と受け取りました。そして、私の感じたそれらは私が生きる上で、そして活動をする上での信念と一致していました。

自分とは一見関係無いと感じる遠くで起きている問題は実は自分と繋がっている、そして他者への関心から生まれる協調が自分自身の幸せな人生にも繋がっているということを実感しながら生きて行きたい、と思っているからです。

実は私は小学校での講演で、地球を大きなジグソーパズルに例えて話しています。

一度も会ったことの無い遠くに住んでいる人の、文化や言葉や考え方や肌の色が違う事を伝え、その遠くの違う国の人々と自分が繋がっていることや、一人一人が違うということを伝えています。

そこで、「一人一人みんな違うけれど繋がっている。地球は大きなジグソーパズルなのでは無いでしょうか？」と問いかけています。

自分の回りにも目を向けられる人、自己中心的になって欲しくないとの思いからです。

自分の周りにお友達や、遠くの誰かから助けを求められているかも知れません。

子どもたちにはどの様に伝わっているのでしょうか。

自分は一人で生きている訳では無い事を感じてもらえたらと思っています。

講演を1,500回続けてきた理由の一つに、「諦めないで発信をし続ける」というものがあります。

これは自身を奮い立たせる為に言い聞かせているのですが、信念にも通じるものです。

実は、諦めず動き続けるという事は、考えが違ったり理解されなかったりで確執が生まれる事もあります。ですから辛い事も大変多い訳ですが、逆に発見も多く、その発見がいつしか確信へと変わる事がありました。

その確信は、自分自身と天国にいるわが子の生き様に 問いかける中で生まれます。

発見の一つとして大変大きなものは「イジメは加害者問題である」という基本に立つ事が出来たことではないかと思っています。

それは、香澄が亡くなる4日前に「優しい心が一番大切だよ。その心を持っていないあの子たちのほうが可愛そう」と言った一言からでした。

いじめは、いじている子がそのいじめ行為を止めることの出来る環境を、周りが準備する事に尽きる様に思うようになりました。

その為には、加害者が加害者となってしまった背景

にしっかり寄り添う事、そこからスタートしたいと思うのです。

この視点が間違っていないということをしっかり示してくれたのが、坂上香監督の『プリズンサークル』という映画でした。

この映画は多くの制限の中、約2年間にもわたり刑務所の中で、希望する受刑者に実施されるTCユニット（回復共同体）を追ったドキュメンタリー映画です。

受刑者が自身が受けた心の傷（虐待やいじめ等）を振り返る中、自身の加害行為に向き合っていく様子が描かれていました。

再入所率を半減させるという調査結果もあるプログラムだそうです。

何故今自分が刑務所に入る事となってしまったのか？という今へと心が誘われる様子が描かれていました。

見終わった感想は「私の想像はやっぱり間違っていなかった。」というものでした。

TCユニットは正に私が理想としていた再犯防止のプログラムでした。

この映画もまた、私の講演の中で子どもたちに語っている、ついいじめてしまったり、なかなかいじめを辞められなくて苦しんでいる子どもたちへの、「本当は辛かったね、そんなに頑張らなくても大丈夫。」というメッセージと重なりました。

遺族の立場である私が「加害者とその背景に寄り添う」という発言をする事に違和感を覚える人は少なくないようですが、それはこれ以上いじめ被害者を生み出さたくない、いじめ被害者を救いたいという気持ちから生まれたものなのです。その実現には、加害者自身の過去への振り返りが不可欠であると考えています。

それが結果的には、加害者という名の被害者も同時に救う事になるのではないのでしょうか。

いじめ問題解決は、いじめてしまった子どもに生き直しのきっかけを大人が提供する事であると思います。真っ白な心で生まれた子どもの心は、様々な環境の中で何色に染まっていくのでしょうか。

少年院での講演を重ねる中でも、職員の皆さんの話からその答えを見つけていた気がしていました。いじめをしてしまった子どもの背景にしっかり寄り添い、その辛さに心から共感した大人が「あなたも辛かったね、よく頑張ったね。」と共感したならその子どもはどのような気持ちになるのでしょうか。

もし、自身の行為の卑劣さに気付き、もういじめはしたくないという気持ちがふと生まれたなら、その時再発防止の可能性も生まれるかも知れません。

被害者遺族の多くが口にする「もうこんな悲しい思いをする人は私を最後にして欲しい。二度と同じようなことが起きて欲しくない。」との思いに応える為には加害者の背景にしっかり寄り添いたいと思います。

次に見たのは、隅田靖監督『子どもたちをよろしく』という作品でした。

子どもたちの置かれている貧困や虐待、いじめの過

酷さが描かれていました。

言うまでも無く、この様な子ども達を守る責任は大人にある訳で、それがそのままタイトルになっているのだと思いました。

これも勿論一言では説明出来ませんので簡単な内容と言だけ私の感想を書きます。

パチンコに興じお金の管理が出来ない父親によって貧困と虐待の環境に置かれている洋一（中2）は、「ゴミオ」とあだ名を付けられ3名の同級生からいじめを受けていました。

洋一はその状況に絶望し最後に命を絶ちました。

ネグレクトと肉体への暴力も加えて貧困状況に洋一を追い詰めていた父親は、洋一の自殺後記者会見で「学校はいじめは無かったと言っています。（中略）いじめ根絶に向けて・・・（涙）・（中略）最愛の息子洋一を返してほしいと思います。」と語っていました。

この映画を見た直後、偶然私は2件のいじめ提訴の記者会見をテレビのニュースで見ました。私同様この映画を見た人は我が子が自殺して提訴した親の背景をどの様に想像したでしょう。

最後にもう一つの作品を紹介したいと思います。

1996年に起きた米アトランタ爆破事件が題材のクリントイーストウッド監督『リチャード・ジュエル』という作品です。

無実で有りながら爆破事件の容疑者にされてしまったりリチャードジュエルとその彼を救うために立ちあがった弁護士の実話です。

松本サリン事件で報道被害を受けた河野義之さんの事件、そして今も起きている様々な事件を想像しながら是非ご覧頂ければと思います。

『わたしは分断を許さない』の上映後に堀潤監督からパンフレットへサインをして頂きました。サインの横に書かれていた文字は「共に発信を！！」でした。

今後も発信をし続けながら講演回数が2,000回になる前にこの問題を解決したいと思っています。そして解決の目処を付け、早くこの活動を終息させることが私の最大の願いです。

外出自粛要請によってしばらく映画は見られませんが、いつかコロナウィルスはピークを迎え、ワクチンの開発によって終息に向かうと思います。しかし、どうしていじめ問題は終息に向かうことなく増え続けているのでしょうか。いじめ問題のワクチンは“いじめ防止対策推進法”です。法改正により間違ったワクチンの開発が進められない事を、心より願っています。

20年近く前になりますが、NHK在籍時代の堀潤監督は、我が家へ取材に来ていただいたことがありました。当時の若いイケメン記者が今では感動作の映画監督です。

強い信念を持って発信し続けている堀潤監督をリスペクトしています。

1500回の講演数とともに月日の流れを実感しつつ・・・



## ◆ ピンクシャツデー 参加報告

去る2月26日に横浜駅東口そごう前の新都市プラザイベントスペースにおいて認定NPO法人神奈川県子ども未来ファンド主催による「ピンクシャツデー2020in神奈川」が開催されました。当日はコロナウイルスの影響で当初予定されていた“ライブステージ”“ミニ朗読劇”などが中止され、当法人もパネル展示のみの参加となりました。当日発表予定だった内容を今回の紙面を使ってお伝えさせていただきます。

皆さんこんにちは。NPO法人ジェントルハートプロジェクトという、いじめに特化した活動をしている団体の小森新一郎と申します。私たち夫婦は20年以上前に一人娘をいじめ自殺で亡くしたいじめ自殺遺族です。親としてわが子を守れなかったその理由を探しながら、いじめについて学んでいく中、この問題が大きな社会問題であると同時に、加害側の子どもが抱えている心の問題だと認識するようになりました。また、この活動をしていると、せめて今生きている子どもたちの命を守りたいという思いが大きくなり、二人で考えつくあらゆる事を一つずつやってきました。しかし、残念ながら私達大人の力不足から、この問題の解決には至っていないというのが現状です。今も心を深く傷付けられる子ども、そして死へと追い詰められる子どもは後を絶ちません。

このような流れを何とか変えたいと思いながら活動していく中、7年ほど前にいじめ防止対策推進法ができました。それでも残念ながら十分な効果が出ているとは言えません。その原因の一つには、『何があっても傷ついている子どもの心と命を守り抜く』という大人たちの覚悟が感じられないという部分があると思います。更に付け加えれば、先頃報道された神戸での教師同士のいじめの問題でも明らかなように、教員同士のマネジメントという基本部分でさえもままならない学校もかなり存在していて、それが氷山の一角としてニュースになっているだけで、いじめ問題に対する大人全体の連携が取れているとは到底言えない現状です。このままでは、子どもたちのいじめを防ぐことは難しいと思います。

いじめ問題解決のスタートは学校のいじめ対策チームを機能させ、教員、保護者、まわりの大人が総がかりでこの問題に向き合うことだと思います。

本日のこのピンクシャツデーのイベントは、まさに大人総がかりで向き合う一つの形では無いかと感じていますし、その重要性を再認識して頂きたいと思います。

今日は、娘の写真と共に数名の子どもたちのメッセージを展示させて頂いておりますので後ほどゆっくりご覧ください。それでは、皆さんに子どもたちの声に耳を傾けて頂きたいと思います。



当法人は大変多くの学校で講演させて頂いていますが、講演後の感想文の中に「大人へのお願い・伝えたい事」というコーナーを設けており、そこで子どもたちの率直な声を聞く事が出来ます。本日紹介させて頂くのは、小学校4年生から6年生の声です。彼らの声に、私達はどうかどう答える事が出来るのでしょうか。引き続き理事の小森美登里から紹介させていただきます。

《 大人へのお願い・伝えたい事 》当日の原稿から抜粋

【 小4男子 】

「やられたらやりかえしじゃないさ！」  
なにかまちがっている気がします。  
もう少し、よくかんがえなおしてください。

【 小4男子 】

自分がやられていやなことは、人にはぜったいやらないでください！

【 小4女子 】

わたしを産んでくれてありがとうございます。赤ちゃんの時から、ずっと子育てしてくれてありがとうございます。これからもたくさんお世話になりたいと思います。  
これからもよろしくおねがいします。

【 小5男子 】

大人の人たちの中にはいじめをたいしたことないと考えている人もいます。  
しかしいじめはあってはならないことなのです。いじめを重大なことだと考え、いじめられている子をたすけてあげてほしいと思います。

【 小5女子 】

「いじめぐらいで命を絶つなんて・・・」と思っている大人がいるかもしれません。  
しかし、学校でなければ、いじめとぎゃくたいは同じものです。「いじめられる方にも原因あるでしょう」という大人もいるかも知れませんが、それが理由でいじめるんですか？

【 小5女子 】

「いじめは学校で子どもたちがやっていること、自分たちには関係無い」などと言ってほしくないと思っています。そして、いじめによって死にまでおいつめられた子どもに向かい「いじめぐらいで」と思わないでほしいです。

【 小5女子 】

私をうんでくれたこと、育ててくれたこと、色々なものを買ってくれたことに感謝します。

## 【 小5男子 】

大人には、本当にいじめられている子がいたら守ってあげたり、相談にのってあげてほしいと思いました。

## 【 小5男子 】

「いじめられている側が、言い返したりやり返さないのはやさしい心があるからだ。」  
というのをちゃんと分かってあげてほしいです。

## 【 小5女子 】

いじめは本当に辛いです。  
ぎゃくたいと同じなんです。  
たかが子ども同士の問題と思わず、支えてほしいです。  
お願いします。

## 【 小5女子 】

私は、大人の人たちにいじめをかんたんに考えないでほしいです。  
大人がいじめをかんたんに聞き流してしまえば子どもを自殺行いにしむけてしまう事があります。だから、いじめをかんたんに聞き流さないで相談にのってあげてください。よろしくお願いします。

## 【 小5男子 】

いじめられたほうもわるいということはないです。そのようなことはいわないようにしてください。お願いします。

## 【 小5女子 】

子供はぶきような生き物です。つらいとき、かなしいとき、かんじんなときにSOSを出せません。ですが、わかってあげてください。

## 【 小6女子 】

いじている人、いじめられている人、どちらも守って欲しいと思いました。

## 【 小6女子 】

大人がまちがったことをいっていると子どもはそれを信じる。

## 【 小6女子 】

なんか変だなと思ったら相談にのってあげてください。その子のすべてを受け入れてあげてください。それがきっと、いじめられている子たちの勇気・自信につながるから。

## 【 小6男子 】

子供をよく分かってほしい。子供は自分から言えないことが多いと思うから大人が分かってほしい。

## 【 小6女子 】

大人へ言いたいことがあります。  
それは、自分の子を守るのはわかるけど、「やったのになんでかくすの？」  
いじめにあっていた子はきっとそう思い大人をきらい、最後は死をえらぶから。  
じじつをかくさないでほしいと思います。

## 【 小6男子 】

きっと「いじめなんかで自殺するのはよわい」と思う人もいると思います。  
ですが、そうではありません。「いじめなんかで」という考え方をすててほしいと思います。

## 【 小6女子 】

いじめにあったら優しく声をかけてほしい。

## 【 小6女子 】

自分たちは、大人に話してもわかってもらえない事が多いです。  
そのため、大人にいじめられても話しぶらいです。

只今紹介した子どもたちの声は、私の講演後その場で書いて頂いているものです。子どもたちが大人を信頼し、安心して相談してもらえる環境は、私達大人が作るしかありません。子どもの世界で発生しているいじめ問題は、実は子どもの問題では無く、子どもから突きつけられた大人の問題では無いでしょうか。  
辛い、と訴えている子ども達に、あなたが弱いのでは？とか、イヤだと言わないあなたにも問題がある、とか、どうしていじめられちゃうんだろね?等、被害者責任論を言ってしまい、二度と相談してもらえない大人になってはいないでしょうか。本当に子どもに寄り添っているでしょうか。子どもが感じているその気持ちに寄り添い、しっかりとその心と命を守りたいと思います。日頃私が講演の中で子ども達と一緒に答を探しているいくつかの質問があります。その中の二つを皆さんにも質問させて頂こうと思います。宜しければ一緒に考えてみてください。

一つ目は、・傷つけるつもりが無いのに友達を傷付けちゃう事ってあるよね。もし自分の言った言葉や行動で友達が傷付いていたら後から解ったらあなたならどうする？

もう一つは、・そこに理由があれば人は人を傷付けても良いと思いますか？こんな素朴な二つの質問ですが、答は見つからなくても、子どもたちと一緒にこの答を探す作業、その時間がとても大切なように感じます。

日々学校で先生や子どもたちと接している私は、この問題が解決しない理由は大人の中にあると感じています。それを見つけるには、大人がこの問題に目を向けてもらう為、地域と学校をつなげる事が大変重要と感じています。そのためにも、教員研修の充実を図れるよう、もう一頑張りしてみようと思っています。



## ◆ 養護教員の感想文から

今回は、小学校の養護教員の先生方の感想文です。学校の担任でもない、親でもない立場の保健室の先生は、子どもたちにとってどの様な存在なのでしょう。普段あまり目にする事のない学校現場と保健室の現状をご理解頂く一助となれば幸いです。

◆ いじめをした子と話した時の事。「友だちがほしかった。だから、自分の周りに力（いじめ）で友だちを作った。だけど、周りに人、友達がいても、誰もいないような気持ちによくなった。むなしかった。」いじめを止めさせる為、加害者の背景に寄り添う事は時間がかかるけれど、いじめを止めさせる大切な手立てだと強く感じました。

今の自分に出来る事は、いじめを一人で抱え込ませないように、子どもたちの様子を常に気を付ける。

やっとの思いでいじめの話をしてくれた子の命を守る為に必要な情報は教員同士で情報共有を行う。

子どもたちに信頼される大人、教師になる！

◆ 学校内、教職員の中には今でも「被害者責任論」を強く訴える人もいます。とても残念な気持ちになるが、何も言えない自分もいます。

今日の小森さんの話を聞いて、被害者責任論を訴える人や「うちの子だけじゃない」「私だけがやっているんじゃない」と言っている人たちに「そうじゃないでしょ」と言える気がします。

やさしい心を持った子どもたちや、やさしい心であふれた世の中になる手助けが出来るよう、これからも頑張っていこうと思えました。

◆ 「圧倒的な恐怖」という言葉を聞いて、学校の教室の中が全てだったことを思い出しました。

子どもの頃は、教室の中が世界の全てで「この中でもし自分がいじめの対象になったらどうしよう」と考えていました。そうならないように回りにあわせていたりしていました。大人になると、その感覚を少しずつ忘れていくと思います。

◆ 以前働いていた学校でいじめがあった時、「なぜいじめられている側が転校しなくてはならないのか」という議論になり、いじめていた子3名を転校とした事を思い出しました。被害者の受けた肉体的、精神的苦痛に関しては色々な議論がなされましたが、加害者側へのアプローチについては十分ではなかったかも・・・と今日の話聞いて考えるところがありました。保健室には日々たくさん子どもたちが来室します。学校の事、家庭の事、色々な悩みや思いを受け取ることがありますが、教員として、一人の大人として信頼をして話してくれた事に対して改めて真摯に向き合い、自分に出来ることは何かを考えながら行動していきたいです。

◆ “いじめ”に関して、深刻に考えているつもりでこれまで勤務していましたが、それは本当に“つも

り”でしかなかったのではないかと考えさせられました。いじめを疑う案件があればどうするかマニュアルでの対応になっていたのではないかと、とすごく反省しました。

正しさだけを伝えようとしても決して心には届かないと思います。

心に、背景に寄り添う為にはどうしたらよいか、その子に合った支援を見つけ出していこうと思います。

◆ いじめ⇒虐待、に言い換えることで重みが変わってくると感じた。いじめときくと、ちょっとしたもめこどかなと思うが、虐待ときくと犯罪だと思い対応も変わる気がする。

実際、いじめにまとめられるが、暴力は傷害罪にあたるし、お金をまきあげられれば恐喝になる。いじめということばは本当の罪を隠す気がした。

◆ 今年度、自校でもいじめの認知をしました。いじめを見つけた時の対応について実際にとった対応と比べてみました。自校では、まず当事者に聞き取りをしていました。たしかに「大丈夫」と本人は答えていました。事情を聞きとった後の対応から私は携われなかったのですが、チームとして考える、対応する必要がある事案を全員がきちんと最後まで把握しきれていないことをずっと心配しています。

いろいろな人の視点で加害、被害の背景を探る必要性を改めて感じました。

子どもにとって、担任でも顧問でもない立場の養護教諭は、全てを打ち明けなかったとしても何らかの「しんどさ」を出せる相手だと思っています。

そんな時に私たちが、どういった大人であるべきなのか、まず本人の何を受け止めてあげるべきなのかを教えていただけで良かったです。いじめ、不登校の連絡会や校内研究などで認知、発生件数について何度かふれていますが、それに慣れてしまわないこと、アンケート結果が本当の状態だと思わないことを心にとめて、加害行為を止められるようにその背景を読みとれる力を身につけていこうと思います。



最近ではSNS等によるいじめ対応が社会で話題になっています。この件に関連した記事が東京新聞で取り上げられ、小森美登里のコメントが掲載されました。

## こちら特報部

無理して登校させず、リリーススクールなども活用するというのが近年の考え方。田畑校長も選択肢は多い方がいいとは思っている。「子どもに拒まれたら深追いしないでいい」と教員が誤解してはいけないとくぎを刺す。「地道に足を運んで話を聞こう」といえないと。子どもが命を絶ってしまったりそれまで生きていくれるうちは何かができるのだから」

文部科学省の有識者会議は二〇一八年三月、いじめなどの相談を会員制交流サイト(SNS)で応じる仕組みを広げるよう求める報告書をまとめた。子どもの心が揺れる長期休み明け前やSNSを利用しやすい夜間を中心に実施。臨床心理



## 認知件数最多 重大事態27%増

①スマホを手にマモレポについて語る隈有子社長 ②マモレポの越ヶ谷小専用サイト



## SNS活用 国が推進 情報量増える可能性

士やSNSに慣れた若者らを相談員に起用し、人工知能の活用も挙げた。自殺をほのめかすなど緊急性があれば相手の了解を得て通話でやり取りし、学校や警察に伝えるよう促している。

大阪大大学院の小野田正利教授(教育制度学)は越ヶ谷小の試行を「相談のハードルを下げ、問題を把握しやすい環境にしたのは意義がある」と評価。一方で、学校が対応しきれぬかどうか危ぶむ。

いじめ防止対策推進法は、子どもが心身の苦痛を感じるものを広く「いじめ」と定義。学校は疑いを含めて把握した段階で速やかに事実確認すると定められているものの、ネットを介したシステムは大量の情報流れ込み、判断に迷うケースが出ると考えられる。「保護者や被害者は学校の即応を期待しているのに、それができなければトラブルや不信感を招く。対処できるだけの人員確保が課題になる」(小野田氏)

文科省によると、一八年

# 学校・教員 対応力上げる必要

度全国の小中高校と特別支援学校計三万七千九百九十二校が認知したいじめは、前年度比31.3%増の五十四万三千九百三十三件。調査方法が比較できる一三年度以降、最多だった。いじめ自体が増加したのではなく、積極的に把握しようとした結果といわれる。

ただ、同法で深刻なケースを指す「重大事態」は一八年度に六百二件(前年度比27.0%増)あり、うち命や心身に被害が及ぶ「一号事態」は二百七十件(同41.4%増)、長期欠席を余儀なくされる「二号事態」は四百二十件(同26.5%増、1号とも重複を含む)と状況は悪化している。いじめを見つけても解決できないか、深刻になるまで見過ごされている恐れがある。

また、全体の二割の学校はいじめをゼロと報告。さらに、都道府県別の人口千人当たりの件数は最多の宮崎県が一〇・三件なのに對し、最少の佐賀県は九・七件と大きな開きがある。調査するのは「発生」ではなく「認知」の件数のため、見つける努力をしているかどうかの差も取れる。

いじめ問題に取り組むNPO法人「ジェントルハートプロジェクト」の理事で、高校生だった一人娘をいじめ自殺で亡くした経験

がある小森美登里さんは「早期発見しても、初動で正しい対応ができない教員があまりに多い。いじめは命に関わる問題と捉え、教員の対処能力を上げる必要がある」と話す。

小森さんは講演などを通じて、「教員が全くいじめに気付かないはずがない」と断言する何人かの教員に出会った。「でも、多くは事が収まるまで静観するか、加害者と被害者を同席させて事実確認をする。それが自殺などを招くまいし対応だと分かっている」

まず同級生ら周辺から聞き出し、被害者に確認した上で加害者に向き合うよう勧める小森さんは「加害者は何かストレスを抱え、心の安定を保つために他人を傷つける。いじめに走らせたものを突き止め、解消する」ことが欠かせない」と強調した。

**ポイント**

いじめへの対応を学校だけに任せるのは無理がある。家庭だけでなく地域にも役割はあるだろう。ただ、子どもたちが毎日のように通い、当事者同士が長時間、一緒に過ごしている学校に課せられた役割は重い。教員一人一人がが事として考えれば、最悪のケースは防げるはずだ。(千)

MONOCL 23

## ◆ 活動のご報告と今後の予定 ◆

日付	主催者	都道府県	都市	人数
2020/4/13	下関市立菊川中学校	山口	下関	250
2020/4/14	下関市立豊北中学校	山口	下関	130
2020/4/16	藤嶺学園藤沢中学校一年生	神奈川	藤沢	120
2020/4/17	山手学院中学校	神奈川	横浜	
2020/5/9	霧島市立溝部中学校	鹿児島	霧島	100
2020/5/21	徳山工業高等専門学校	山口	周南	810
2020/5/29	霧島市立隼人中学校	鹿児島	霧島	790
2020/6/11	南房総市立嶺南中学校	千葉	南房総	270
2020/6/13	霧島市立日当山中学校	鹿児島	霧島	400
2020/6/17	小山工業高等専門学校	栃木	小山	210
2020/6/19	八尾市立志紀中学校	大阪	八尾	450
2020/6/23	滋賀県総合教育センター初任者研修①	滋賀	野洲	140
2020/6/25	滋賀県総合教育センター初任者研修②	滋賀	野洲	160
2020/6/30	霧島市立霧島中学校	鹿児島	霧島	100
2020/7/3	千葉県葛南地区人権研修会	千葉	習志野	100
2020/7/31	岡山大学教育学部附属中学校教員研修	岡山	岡山	120
2020/7/31	岡北中学校区教職員人権教育研修会	岡山	岡山	110
2020/9/3	東海大学附属甲府高等学校	山梨	甲府	850
2020/9/25	北総地区社会人権地区別研修会	千葉	佐倉	
2020/10/14	山梨県立身延高等学校	山梨	南巨摩郡	280
2020/10/14	千葉県教育庁社会人権教育指導者養成講座	千葉	千葉	90
2020/11/21	秩父地域自殺予防フォーラム	埼玉	秩父	500
2020/12/9	三重県立四日市中央工業高等学校	三重	四日市	720
2020/12/16	佐倉市人権講座講演会	千葉	佐倉	100

懸念されていた新型コロナウイルスによる社会不安が現実の問題となって世界中に拡大してしまいました。そのような中、日本社会においてもみんなが疑心暗鬼の渦に巻き込まれるのではないかという危機感を持っています。社会全体がお互いの信頼関係に疑いをもち始めてしまったらコミュニティー崩壊の危険性が増大するかもしれません。私たちはいじめの問題に長く取り組んできて感じるのは、子ども同士、子どもと教師、教師と家族、家庭と行政、それぞれの円滑な連携が求められる中、各々の関係性が、とても希薄になってきていることも、今回のような社会不安を助長する要因の一つになっていると思います。人間として生を受けている以上、良好な関係性を前提にしながら社会を作っていくことが理想だと思います。

今回の問題でも若者と年配者、都心部と地方、国政と現場の医療機関、国政と自粛要請で被害を受けている業者や労働者、あらゆる関係性の中で分断が起きているようにも感じています。このままの広がりが続けば医療崩壊と同様に社会の分断も更に進行してしまう事が懸念されます。

こういった時期にあって、フェイクニュースや事象の隠蔽といった雑念に惑わされることなく、人の命と心にしっかり寄り添った連帯の構築を進めることが肝要だと思います。

多くの講演がキャンセルとなり、講演スケジュールが減ってしまいましたので、そのスペースを利用して最近の所感を書かせて頂きました。

NPO法人 ジェントルハートプロジェクト代表理事 小森新一郎